



帰山奉告式を前に水行で身を清める教瑞師(中央)

願満

復刊第十四号

2012年3月

身延別院発行

〒103-0001

東京都中央区

日本橋小伝馬町3-2

Tel 03-3661-3996

Fax 03-3663-2766

帰山奉告式

教瑞師が第初行を成満

大本山中山法華経寺の日蓮宗大荒行堂に第初行として入行していた身延別院の修徒、藤井教瑞師が二月十日、百日間の修行を終えました。教瑞師は同寺祖师堂で行われた成満会に臨み、行の成満をお祖师様に報告しました。成満の日を迎えた法華経寺の境内には、まだ夜が明けきらないうちから、たくさんの寺族・檀信徒が全国から詰めかけました。大荒行堂に至る参道沿いには赤、紫、緑など色鮮やかな成満旗がびっしりと立てられ、この日特有の雰囲気を作り出していました。

午前六時、大荒行堂の瑞門が開くと、寒き百日の修行を終えた百五十六人の荒行僧が俗界に姿を見せました。伸ばしたままの髪と髭が百日間という月日を物語っていました。今行は白木でできた東日本大震災犠牲者の位牌が荒行堂に安置され、供養の祈りが捧げられた百日間でもありました。午前八時から祖师堂で成満会が始まり、荒行僧たちの読誦する大音声の経文が堂内に響きました。その後、荒行僧たちが寺族・檀信徒のもとに次々と戻り始め、教瑞師も元気な姿を見せました。

一月ほど前にも檀信徒一行は教瑞師を見舞いに訪れる機会がありましたが、成満を迎えたこの日の教瑞師は明らかに違った表情でした。寒き百日の修行を成し遂げた安堵感と、確かな自信を漂わせていました。

二月二十五日には、身延別院で教瑞師の帰山奉告式が行われました。教瑞師は、藤井教公住職や藤井教祥副住職、檀信徒らの出迎えを受けて無事に当院に帰りました。教瑞師をはじめ、今行で成満を迎えた計九人の荒行僧が清浄衣に身を包み、檀信徒と共に山門の前を出発。一行はお題目を唱えながら、当院の周囲を練り歩きました。身を切るような寒さの中、荒行僧九人による水行も行われ、たくさんの檀信徒が見守りました。

(四、五面に特集)(平山)



立派な本堂。でも、ふだんは無住だ

御首題を いただく旅

第十四回 千葉県山武市・本円寺

建ち並ぶ寶篋印塔

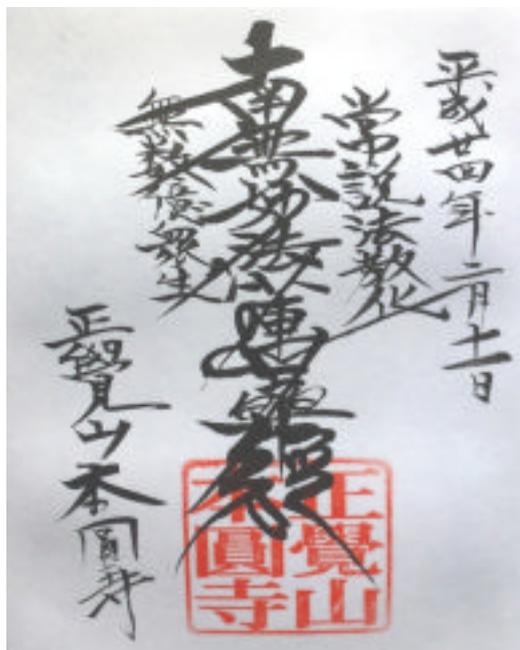
全国各地の日蓮宗のお寺を参拝する旅。いただいた御首題・御朱印の数は千二百五十を超えました。この「御首題をいただく旅」のコーナーでは、日蓮大聖人がお立ち寄りになったとか、本山クラスの寺院であるとか、地域で知られたお寺を中心に紹介してきました。でも、今回の本円寺はちょっと違います。ふだんはだれも住んでいない無住のお寺だからです。

千葉県は日蓮大聖人がお生まれになった場所。誕生寺、清澄寺、法華経寺と三つも大本山があります。県内の日蓮宗寺院数は約五百か寺と言われて、全国で約五千か寺と比べています。日蓮宗のお寺は全国で約五千か寺と比べていますから、その一割が千葉県にあるということになります。ところがお寺を参拝する中で分かったのですが、檀信徒さんの数が極端に少ないために無住になってしまったお寺が千葉県はとても多いのです。そういったお寺は、同じ地域でつながりのあるお寺のご住職が兼務をしていて、檀信徒さんにお葬儀などの法事があるときだけご住職がやって来る、というふうになっているようです。

今年二月に私は、千葉県山武市の蔵光寺というお寺を参拝し、そのご住職が兼務しているという本円寺の御首題を頂戴したのでした。せっかく御首題を頂戴したのだからお寺も参拝しなくてはと、クルマで向かいました。しかし、途中から林道のような狭い道になり、「こんなところにお寺があるの?」というような雰囲気の場合

所になりました。「本円寺駐車場」という看板を見つけ、ほっと一安心。クルマを停めて、急な階段を上っていくと立派な本堂がありました。

さらには私の背丈の倍の高さがある大型の宝篋印塔(ほうきょういんとう)が十基以上もずらりと立ち並んでいました。苔むしていても古そうです。歴代住職のお墓なのか、何も説明板はなかったので分かりませんが、これだけ立派な塔が並ぶ光景はそうそうないと思いました。日蓮宗寺院大鑑で調べましたが沿革は「開山日法。開基岩沢重良右衛門」とあるだけ。詳しくは分かりません。しかし、いつの時代かに法華経の熱心な信者が建てたお寺であることに間違いありません。山の中に、忘れ去られたように建っているお寺がいとおしく感じられてなりませんでした。(平山徹・新聞記者)



厳かに帰山奉告式



荒行僧による勇壮な水行



水行肝文を言上する教瑞師



水取りを着て檀信徒の前に姿を見せた荒行僧

檀信徒の皆さんの顔を思い出し、荒行室の日々を乗り越えてきました。二月二十五日に行われた帰山奉告式で、身延別院修徒の藤井教瑞師はたくさんの方々の見守る中、厳しい修行の日々をこう振り返りました。

この日は朝から小雨の降るあいにくの天気でしたが、帰山奉告式の直前になって雨はあがり、第初行を成就した教瑞師の姿を見ようと百

五十人の檀信徒が当院を訪れました。檀信徒の一行は午後一時から本堂で、教瑞師をはじめ九人の荒行僧らを囲んで記念撮影を行った後、お寺を中心とする小伝馬町の一帯を荒行僧らと共に練り歩きました。一行がお寺に到着すると、荒行僧は本堂前で、ただちに水行に。

水盤の前に位置取った荒行僧は、肝文を唱えた後、一斉に手桶でわが身に水をかけました。二月下旬とは言え、この日の東京の最高気温は一〇・二度。まだまだ厳しい寒さでしたが、荒行僧は勢いよく水をかけ続け、はね返った水しぶきは檀信徒の方にも飛び散りました。その厳しい修行のさまを、檀信徒は息をのんで見守りました。

「皆さんに支えられて成満」



教瑞師が謝辞

水行の後は本堂に場所を移し、厳かに帰山奉告式が行われました。第初行を成し遂げたことを証する「許證」が東京東部修法師会会長で葛飾区積善寺住職の林貫恵僧正から教瑞師へ手渡されました。来賓挨拶では、東京東部宗務所所長で江戸川区長勝寺住職の田村宏順僧正が「東日本大震災とい

うたいへんな災害のあった年に、教瑞さんは荒行堂に入られた。そのご縁で、これからも人々を救う僧侶として教瑞さんは邁進してほしい」と述べました。また、林僧正、岩手県宗務所所長で遠野市法華寺住職の阿部是秀僧正からも祝辞をいただきました。当院を代表して挨拶に立った藤井教公住職は、「(教瑞師は)まだまだ若くして未熟。どうぞこれからも励ましをいただきたい」

林僧正(左)から許證を受け取る教瑞師(写真上)

お経頂戴をする教瑞師(写真左)

山門前を出発する行列(写真下左)

謝辞を述べる教瑞師(写真下右)



と述べました。最後に教瑞師が「私は身延山僧道実修生、信行道場と修行をしました。が、まだまだ足りないことを痛感し、大荒行堂に入ることを発願しました。しかし百日間の日々の中では、もう耐えられないと思ったこともありました。そんなときは檀信徒の皆さんのお顔を思い出し、一つ一つ乗り越えてきました。檀信徒の皆さんの支えがあったからこそ、成満することができました。」と謝辞を述べました。



寺の動き



節分会と星祭りに百五十人



豆まきにはたくさんの方が集まりました

身延別院の節分会と星祭りが二月三日に行われました。立春を前にして毎年恒例の行事で、年男・年女の檀信徒が本堂から境内の参詣者に向かって、袋詰めにした福豆や福銭を勢いよくまきました。この日午後一時から、本堂で節分会追儺式が行われ、檀信徒百五十人がご祈禱を受けました。今年は例年になく寒い寒さに見舞われていますが、そんな中でも午後一時四十

五分の豆まきの時間までには多くの参詣者が境内に集まりました。年男・年女の皆さんが「除災得幸 福は内」と言いながら、大きな枡から一斉に豆をまくと、参詣者は夢中になって受け止めていました。ダンボールの小箱などを持ち参し、それを頭の上に掲げて豆を受ける人の姿も見られました。豆は六斗五升分を用意しましたが数分間でなくなるなど、今年も盛況でした。

豆まき後の福引も大盛況

豆まきの後は、豪華景品の当たる福引きが本堂で行われました。年男・年女として申し込み



福引抽選会も年男年女の檀信徒で大いににぎわいました

を済ませた檀信徒さんを対象に行っているイベントです。景品は本年も、帝国ホテルペア宿泊券、大型液晶テレビ、デジタルカメラなどの豪華なものです。また富士急ハイランドペア招待券、博多鳥鍋セットなどの景品が総代から提供されました。

さらに、高級清酒、写経セットといった、お上人からの提供品も並びました。抽選機からの番号が読み上げられるたび、景品を引き当てた檀信徒さんたちからは大きな歓声が上がっていました。

豆入れ奉仕に十六人

身延別院の檀信徒有志が一月十八、十九日、節分会で用いる豆の袋詰めを地下ホールで行いました。今年は六斗五升分の豆が用意されました。参加者は、豆を杯で袋に入れる役、袋をホチキスで閉じる役など、役割を分担しながら手際よく作業を進めていました。

節分会は二月三日に盛大に行うことができましたが、それも事前に準備をしてくれる皆様のご協力があるからです。豆入れ奉仕にご協力いただいたのは以下の皆さんです。

阿久津喜美子、石田光子、石渡日出子、今井善子、岡本春雄、岡本つね子、甲斐千枝子、勝見登志子、上遠野美津子、北村孝子、黒石鈴子、小島喜恵子、小林聡子、杉山尊子、寺久保トシ子、林好江(敬称略)。ありがとうございました。

荒行堂の教瑞師を見舞い

身延別院の檀信徒の一行が一月九日、千葉県市川市の大本山・中山法華経寺荒行堂と総武霊園、東京都杉並区の堀之内妙法寺を参拝しました。本年最初の団参で新春初詣です。参加したのは藤井住職はじめ檀信徒の皆さん四十人。一行は午前九時にマイクロバスとワゴン車で当院を出発しました。最初に訪れた法華経寺では、荒行堂で修行中の当院修徒、藤井教瑞師を見舞いました。荒行成満まであと一ヶ月に迫ったこの時期、法華経寺境内は全国から荒行僧を見舞いに訪れる檀信徒でたいへんな混雑でした。一行は荒行堂内に案内され、多くの荒行僧に囲ま



法華経寺荒行堂を参拝後、総武霊園で記念撮影

れてご祈祷を受けました。教瑞師は元氣そうで、檀信徒も安心して法華経寺を出発しました。続いて訪れた総武霊園では当院開山で身延山久遠寺第七十三世法主の文明院日薩上人と、当院初代住職で身延山久遠寺第八十六世法主の藤井日静上人のお墓をお参りしました。総武霊園を出発した一行は午後、東京都杉並区の堀之内妙法寺に到着。祖師堂で厄除けのご祈願を受け、境内を案内されました。

新年祈祷会に三百人

身延別院で正月三日、願満高祖日蓮大菩薩「御開帳新春祈祷会が厳修されました。当院の新年最初の恒例行事です。大晦日の夜より門扉を開け、隣接する十思公園では除夜の鐘が撞かれ、町内の住人が多数訪れていました。三日の参詣者は約三百人に上りました。参詣者には祈願木札、曆、葛菓子が授与され、住職からお屠蘇がふるまわれました。

青年会がランドセルを無料配布

身延別院青年会は十二月二十五日、今年四月から小学一年生になる子どもたちにランドセルを無料配布しました。ランドセルは、当院の檀信徒で都内在住の篤志家が青年会の子育て支援活動を知って、子どもたちの健やかな成長に役立てばと寄贈されたものです。これを受けて青年会は中央区内の民間保育所などに呼びかけ、

これを希望する十六人の子どもたちに配りました。子どもたちの中には、すぐさまランドセルを箱から出して背負って、保護者の方と記念撮影をする姿も見られました。青年会では、今後も子育て支援活動を続けていきます。

今後の予定

三月十七日(土)～二十三日(金) 春季彼岸会
二十三日(金) 彼岸会施餓鬼法要並大黒天祭
午後一時より
四月 一日(日) 願満祖師御開帳
八日(日) 花まつり 終日甘茶供養
十四日(土) 十三日講 法要並法話

編集後記

身延別院の藤井教瑞師が日蓮宗大荒行の第初行を達成しました。今回はこれを記念し、教瑞師の表情を特集しました。

教瑞師は身延山僧道実修生として一年間、また信行道場で三十五日間修行に励み、そして今回の百日間の荒行と修行の日々でした。ひとまずは体を労り、英気を養って、その後はまた檀信徒と共に力強く歩んでほしいと思います。

次回発行はお盆過ぎを予定しています。どうぞご期待下さい。

(平山)

北大で最終講義

四月から都内の大学へ

住職の近況

このたび住職藤井は、三月九日に北大で定年退職前の最終講義をしました。当日はインド哲学研究室の卒業生や旧教官、現在の大学院文学研究科の同僚など有縁の皆さん大勢が、九州や四国、京都、名古屋、東京などの遠方からも駆けつけてきてくれて、大変懐かしく嬉しい思いをしました。講義後には学内の百年記念会館のレストランで慰



最終講義風景

労パーティーが催され、花束や記念品の贈呈があり、多くの出席者からねぎらいのスピーチをいただきました。そのあと学外へ繰り出し、賑やかに三次会までおつきあいをさせていただきました。

私は平成八年四月一日に、それまでの勤務校の浜松大学(旧常葉学園浜松大学)から北海道大学へ教授として赴任しました。文学部赴任当時の講座名は文化価値論講座で、そこは宗教学・インド哲学・芸術学の三分野合同の大講座でしたが、私はインド哲学分野の仏教学の教授として招かれたのでした。平成十二年に大学院重点化にもなるとい、大学院文学研究科所属となり、また講座も平成十六年に芸術学が独立したので、宗教学インド哲学講座と組織変わりして、現在に至っています。

北大に赴任してから早くも十六年が経過しましたが、その間、世の中にも大きな変化がありました。その第一は二十一世紀の幕開けの年、二〇〇一年九月十一日に起きたニューヨークの二テロでした。ソ連が崩壊し、東西冷戦構造が消滅した後には今度は宗教や民族の対立激化の時代となると予測されていましたが、まさに今そのとおりの情勢となっています。このテロの時は、私は丁度その年の九月一日から文科省短期在外研究員としてフランス国立高等研究院に来ていた時でしたから、三ヶ月の間、ヨーロッパの緊張をパリとロンドンとで直接肌身に感じた日々で、私にとって忘れがたい思い出となりました。



花束を贈呈されました

それから十年、今度は二〇一一年三月十一日、東日本大震災とその後の大津波、福島第一原発事故が起きました。地震は自然災害ではありませんが、日本はこの大地震によって戦後最大の国難に遭い、まだ十分に復興のルールも敷かれていない現況はまことに心が痛みます。さらに原発事故の後始末は今後何十年と続くでしょう。憂慮すべき事態です。

さて、私の最終講義の題目は「東アジア仏教と『涅槃経』」でした。大乘の『涅槃経』が中国仏教でどのように受容されていったのかということに『法華経』と関連させながら、思想的に概観したものでした。北大でやり残したことは多いのですが、これまでつつがなく札幌と東京との二重の生活を続けて来られたのも、仏天のご加護と身延別院檀信徒の皆様のおかげとご理解の賜と心から感謝申し上げます。

なおこの後、東京では四月一日より文京区春日にある国際仏教学大学院大学へ教授として勤めることになりました。これまで通りよろしくお願ひ申し上げます。

(写真は当日最終講義に出席した上野蘭子さん撮影)(「檀信徒さん登場」休みました)